あなたに選択肢を与えます

鉄焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたに選択肢を与えます

【Ｎコード】
Ｎ２５９９Ａ

【作者名】
鉄焔

【あらすじ】
生きる意味、生きる楽しさ、生きる素晴らしさ、生きる糧これらを忘れた人の運命を変える死神のお話です。

イジメヲウケテルオンナノコ　1（前書き）

初めて小説を書きます。暖かい目で見守って下さい。

イジメヲウケテルオンナノコ　1

「あれ？此処は何処……？。」
私はふっと気づくとそこは何も無い真っ白な部屋の中に居た。
彼女の名前は志水（しみず）　恵（けい）１７才高校二年生だ。
見た目は眼鏡をかけ髪はボサボサ胸も無いお世辞にも可愛いとは言えない…。
「そうだよ！私、学校の屋上から飛び降りって……！！！此処ってまさか…あの世！？」
私がそう言うと何処から声が聞こえてきた。
「そいつは違うよお嬢ちゃん♪。」
私はその声に驚いてしまった。
「誰！？誰なの？いったい何処から喋ってるの。」
「おっと！これは失礼ちょっと待ってな。」
そう謎の声が言うと急に黒い煙が出てきた。
その黒い煙は部屋の中央に集まりだんだんと人の形になり人の形になった黒い煙の中から人間が出てきた。
その人間はこの真っ白な部屋に合わない真っ黒なローブを身に纏っている。
私はあまりの出来事に驚きその場で腰を抜かし、しりもちをついてしまった。その黒いローブを着てる人間は私に手を差し伸べてくれた。
「ごめんな驚かせるつもりは無かったんやけど。」
しかし、私は
「触らないで。！！」
っと言い差し伸べてくれた手を払ってしまった。
「いったい貴方は誰なの！？こんな部屋に閉じ込めて此処があの世じゃなきゃいったいなんなのよ！？教えなさいよ！！。」
私は溜まっていた怒りをその人にぶつけたそれと同時にいままで我

慢していた不安が一気に溢れ出し泣いてしまった。
「泣かんといて今から話しするから。ほらこれで涙拭いて。」
そう言うと黒いローブを着てる人はハンカチを取り出し恵に渡した。
「ありがどう。」恵は泣きながらお礼を言い貸してもらったハンカチで涙を拭いた。
黒いローブを着てる人は頭のフードを脱いだその顔はまるで女性のような顔立ちをし髪はやや長めの黒髪そして目の色は赤だった。
「初めまして♪俺の名前はクロウ性別はまぁこんな顔やけど男だよ。」
っと微笑みながら言った。
しかし急に微笑んでいた顔が真剣な表情になりこう言った。
「職業は死神。」
「えっ。？」
私はその発言に驚き声を出してしまった。

イジメヲウケテルオンナノコ　1（後書き）

見てくれてありがとうございます。ご意見、感想をどんどん言って下さい。（汗）

イジメヲウケテルオンナノコ　2

「えっ！？今、死神って言ったよね？…」
私は驚きながら男に尋ねた。
「言ったよ。」
と男は優しく微笑みながら答えてくれた。
「死神って魂をあの世に持っていくあの死神？。」
「ん～～ちょっと違うかな…。」
っと言い死神と名乗る男は頭ボリボリ掻きながら困った顔をしていた。
「いいかい？死神の仕事は迷える人を救う事なんだ。」
「えっ！？じゃ貴方は私を救う為に来たの？。」
「まぁそうなるかな…。」
「なら早く私をあの世に連れて行ってよ！！。」
「それは出来ない。」
「なんで！？どうして！？私は死んだんでしょ？だから貴方は私をあの世に連れて行っく為に来たんでしょよ！？。」
私はまた怒鳴ってしまった…。
「いいか？君は何か大きな勘違いをしてる！！俺達、死神は生きてる人間の魂をあの世に持っていけない。君の魂をあの世に持っていくならあの時迷える人とは言わず迷える魂っと言ってるはずだ。」
「そんな私…生きてるの？…でも私は屋上から飛び降りたはずなのに…なんで？。」
私はまた頭が混乱し始めた…。
「ハァ～…。」
男はため息つきながらポケットに手を突っ込みながら何かを探している。
「おっ♪あったあった。」
そう言うと男はポケットから手を出した。その手には黒く汚れた手

帳を持っていた。
「え～と、志水だからさ行さ行っと。」
男は私の名前を言いながら手帳をみている。
「あったあった♪」
男は私の名前を手帳から見つけたようだ
「志水　恵（しみず　恵）性別、女　私立慶遙女学院に通う１７才
高校二年生。趣味は漫画を書く事　好きな物、ケーキ全般と紅茶
嫌いな物、辛い物　好きな異性は居ない　尊敬する人は祖母と祖父
　そして…今回、飛び降りた理由は同じクラスメイトによるいじめ
が原因。」
男はそう言うと手帳を閉じこちらを見た
「立っているのもしんどいよね？ちょっと待ってね。」
男は私にそう優しく微笑みかけた
パチン♪。
男は指を鳴らした。すると何もない真っ白の部屋にこれまた白いテ
ーブルと白い椅子が現れた。
私は驚きながらも出てきた椅子に腰をかけた。

「ケーキと紅茶が好きだったよね？。」
っと男は私に問いかけた。
私は黙ってうなずいた。
「ケーキは何が良い？。」
「ケーキなら何でもいいです。」
「わかった」
パチン♪。
また男が指を鳴らした。
こんどはチーズケーキと紅茶が出てきた。
「さぁ食べて。」
私は出てきたケーキと紅茶を少し見てから食べた。
「美味しい！！。」

私はケーキのあまりの美味しさに声がでてしまった。
「良かった♪気に入ってくれて。」
男は私がケーキを気に入って嬉しそうだ。
「じゃ本題に入るよ」
男が急に真剣になった。
「さっきも言った通り君はまだ生きている。理由は君が飛び降りた下にはちょうど教頭先生が置いていた車が在りその車がクッションとなり一命を取り留めた。しかし現世の君は一命を取り留めたものの病院の集中治療院で未だに意識を回復してない。そして今、君が居るこの部屋は現世で生きる事に迷ってしまった人が来る部屋。『運命の部屋』だ。」
「そうか、私まだ生きてるんだ。教頭先生とんだ災難だっただろうな私が車の上に落ちて多分、車ペッシャンコになったんだろうな。そうだ!!さっきあなた。」
「クロウって呼んで。」
「あっ!はい。クロウさんさっき運命の部屋って言ったけど運命の部屋っていったい何?」
「そうだね…じゃあ言うね。」
そう言うとクロウさんはいきなり私に指を差してこう言った。
「いまから、君に二つの選択肢を与える!!。」

イジメヲウケテルオンナノコ　3

「いまからあなたに二つの選択肢を与える。」
確かにクロウさんはこう言った。
「いまから、俺が２つの選択肢を言うその内どちらかを選んでこれであなたの運命が変わる。」
クロウさんは私にそう言った。
「運命が変わる…？。」
「あぁ、いまから言う選択肢をよく聞いていてね。まず１つ、現世に戻りまた自殺をする。２つ、現世に戻り運命を変える。」
「運命を変える…？。」
「今、君はいじめを受け続けるって言う運命の中にいる。だからその運命を変えるんだよ」
「どうやって…」
「それは言えないね～。まぁヒントぐらいはあげるよ。」
「本当に今の運命を変えれるんですね」
「変えれるよ♪まぁ君次第だけどね。」
「なら、２つ目の選択肢を選びます。」
「承知しました。」
私は何故だか運命を変えるような気がした
「じゃ約束通りヒントを言うね。君が退院して学校に行けるようになってから３日後に必ずいじめの首謀者がバイトしてるコンビニに行け」
「それが、私の運命を変えるヒント？」
「そうだ。よし！今から君の魂を現世に戻す。」
クロウさんがそう言うと急に霧が出てきた。
そして私はだんだん意識が薄れていった。
！！！！。
私は目をあけると白い天井が見えた。

「先生！！先生！！患者さんが目を覚ましました！！。」
大きな声で看護士さんがそう叫んで走って行った。
「あれは夢だったのかな？」
私はそう思いながら眼を閉じて眠ってしまった。

イジメヲウケテルオンナノコ　4

入院してから約2ヶ月がたった、怪我は順調に回復し退院ができそして学校に行けるようになった。
しかしそれは私の地獄の日々が再び始まる事を示してる。もしクロウさんが言っていた事が本当なら3日後に私の運命が変わるのかもしれない、でもあれがただの夢だったらどうしよう、私はそう思いつつ学校に登校した。
ハァ……。
私の思ってた通り、私の机には菊の花が置かれていた…。
「あら？志水さん、まだ生きてたの？
私はてっきり死んだと思ってたわ。」
そう言いながら笑っている女の名前は西川　藍　（にしかわ　あい）
私をいじめている奴等のリーダーだ。クロウさんが言っていたいじめの首謀者は多分こいつの事を言ってるのだろう。
「何か言いなさいよ？あなたもしかして幽霊？」
相変わらず人を見下した物の言い方は腹が立つ。しかし何か返事しないと酷い目にあう。
「生きてます…。」
「あら？そうなら早く私の視線から消えて。」
貴女が私に話しかけて来たんだろう。私はそう思いながら自分の席についた。何か楯突いたら酷い事されるから。
もしあの事が本当ならもし私の運命が変わるなら私は今日から3日間いじめを頑張って耐えてみよう、もしあれが夢だったらまた自殺をすれば良い。そんな事を思いながら私は授業を受けていた。
休み時間、なんとなく私はクロウさんの顔を思い出した。
かなり綺麗な顔だったなまるで女の人みたいだった。そうだ描いてみよ私の趣味は漫画を描く事だけど絵も得意だ美術ではいつも成績は良い方だそれに絵を描いてる時はいじめの事を忘れるだから私は

クロウさんの絵を描いた。
（できた！。）
私は心の中でそう叫んだ私ながら良いできだ。
「志水さん、何描いてるの？」
（ヤバい！！西川だ！！。）
私はとっさに描いたクロウさんの絵を隠そうとしたが絵は西川に取られてしまった。「やだ！！気持ち悪い、この子女性の絵を描いてる！！志水さんってもしかしてＧＬ？」
「違います！私はＧＬじゃ無いし、その絵の人は男の人です」
「男？貴女みたいなブサイクな女が何処でこんな男性と会うのよ！？。」
「それは……。」
「あら？なんで答えれないの？まさか妄想でこんな絵を描いたのね」
私は黙ってしまった当たり前だ、だって夢かもしれない所で会って人だなんて言えない。
「ふん、やっぱり妄想で描いたのね気持ち悪い。貴女みたいな人が絵を描くなんて世の中の絵描きに失礼よ！！」
そう彼女は言い私の絵をゴミ箱に捨てた。
私は黙って捨てられた絵を拾った…。
（あと3日の我慢あと3日の我慢）私はそう自分に言い聞かせ耐えた。そして運命の日が来た、私は今日と言う日をどれだけ待ち望んだか。しかしその反面、もしあれが夢だったらどうしようと言う不安でいっぱいだった。
そして学校が終わった。
西川がバイトに行ってるコンビニに行ってみよう。
（でも私の運命が変わるってどんなことが起こるんだろう…？確かうちの学校ってバイト禁止だったよね…まさか！？バイトしてる事を先生に言うわよって脅すの？まさかそんなわけないよね…だって西川がバイトしてるってクラスみんなが知ってるもん。）

私はそんな事を考えながら西川がバイトしてるコンビニに入った。
「いらっしゃいませー。」そこには私をいじめてる西川じゃなく明るく優しい西川が居た。
しかし西川は私が入ってきた事に顔を歪めた。
しかし私はそんな事をお構いなしに私の運命が変わる出来事を雑誌などを立ち読みしながら待った。
そしていきなり。

「おい！！てめぇら！動くんじゃないぞ！。」
私はその大声に驚き入り口の方を見た。そこには覆面を被り刃渡り２０センチのナイフを右手に持ってる男が立って居た。
「キャー！！強盗！！。」
「うるせーんだよこの女！！。」

西川が叫んだことに強盗は怒り西川を羽交い締めにし首にナイフを突きつけながらレジに行った。

「ひっやめてよ。」
西川が今にもなきそんだ。

私はいい気味と思っていたがなんだか西川が可哀想に思えたきた。

その時クロウさんの声が聞こえた。
「さぁ君はどうするんだい？。」

私は目の前で困ってる人を見捨てたりしないそれが例え私をいじめてる西川でも。私は勇気を振り絞り強盗に言った。

「その人を離しなさい人質なら私が代わりになるわ！！。」

「はぁ？お前何言ってんだ？まぁ人質は多い方がいいかよしお前もこっちに来い。」

私はそう言われ犯人に近づいていき犯人の一瞬の隙をつき犯人にタックルをした犯人は私がタックルをするなんて予想にもしてなく倒れ店長の男の人が犯人を取り押さえた。

「どうして？貴女をいじめてる私を助けたりしたの？。」

「そんなの知り合いが困ってるのに見捨てるわけないじゃない。」

「ありがとう、ありがとう」

と西川が私に泣き付いてきた。

そして警察が来て強盗を連行し私達は事情聴取を受けた。

そして次の日、私は学校に登校しクラスのドアを開けたしかしいつもとクラスの雰囲気が違うクラスのみんなが私を見つめている中には私を尊敬の眼差しでみてる人がちらほら居る。

私はその事を気になりつつ席に座った。いきなり私の後ろの席の人が私に話し掛けてきた。

「ねぇねぇ志水さん昨日、強盗を捕まえたんでしょ？。」

「えっ！？そうだけど…どうして知ってるの？。」

「もうクラス中の噂よ。でも凄いよね～ナイフを持ってるのにも関わらず西川さんを助けるなんて。」

そんな話をしていたら先生が来て私は校長室に呼びだされ警察に賞

状が渡されクラスに戻る途中に西川とすれ違いに西川が私に一言。

「ごめんね…。」

と言った。

そして、それいらい私に対してのいじめも無くなった。

まさに私の運命が変った。

ありがとう、クロウさん。

イジメヲウケテルオンナノコ†完†。

イジメヲウケテルオンナノコ　４（後書き）

本当に最新、遅れてごめんなさい！
最近、忙しくてなかなか小説がかけませんでした（T＿T）
これからも見守って下さい。

フリョウセイネン　１（前書き）

いや～またまた更新が遅くなりすいませんｆ^｜^；

フリョウセイネン　1

晴れた水曜日のお昼、廃工場で青年達が集まっている。
しかし何かがおかしい……？。
真ん中に金髪の青年が立って居り、その周りに２０人ほどで囲んでいる。これがリンチと言う物だろうか。

「おい！！コラ！！てめぇ最近、調子に乗ってるみたいやな！？。」
鉄パイプを持ってる少年が真ん中に立ってる金髪の青年に怒鳴ってる。

しかし、金髪の少年はフッと鼻で笑い回りを囲んでる青年に言った。
「いくら、アンタ達が儂に言うても全然怖くないわ！！。儂、１人に対して２０人で囲まな勝ってる自信ないもんな？。」

その事に腹を立て、鉄パイプを持ってる青年がまた怒鳴った。
「ふざけんなよ！！みんな奴をぶっ殺せ！！。」

鉄パイプを持ってる青年がそう言うと、金髪の青年を囲んでいる青年達が一斉に金髪の青年に襲いかかった。

あれから、約１時間が経っただろうか？。金髪の青年に襲いかかった青年達はみんな呻き声を上げ地面に倒れ込んでいる。
「ふん…。所詮、２０人集まった所で儂に勝てるわけ無いねん。」

「クソ……。てめぇ、何様のつもりやねん……。」

「儂か？そうやな…ネメシス、神かな？（笑）」

そう言い金髪の青年は、その場を後にした。

金髪の青年の名前は西下（さいか）　昭仁（あきひと）１７歳、髪は金髪に染め短髪だ顔は世間一般的に観ると格好いい方だろう。

彼は空を見上げてポツリと呟いた。

「人生ってつまんねぇな……。」

彼はそう言うと溜め息をつき帰宅した。彼は１人暮らしをしているらしく家の鍵を開け早すぎる就寝についた。

フリョウセイネン　２（前書き）

今回からは西下　昭仁視点になります♪

フリョウセイネン　2

「んっ……。」

儂は目を覚ましたが、何かがおかしかった…。

「ここはどこだ?。」

儂が起きるとそこは壁も床も真っ白な部屋に居た。

「おかしい…。儂は確かに自分の家で寝た筈や…。現に儂は寝間着をきとる。」

「もしも〜し。大丈夫ですか?。」

儂はいきなり聞こえた声に驚いたが、すぐに声が聞こえた方を見た。

そこには、黒いローブ着ていて綺麗な黒髪で赤い色の眼を持つ女?が白い椅子に座っていた。

「ちょ、そこの嬢ちゃんここは何処やねん?。」

「嬢ちゃん?。あぁ俺の事か（笑）言うとくけど、俺は男やで。後ここは運命の部屋。」

「はぁ?運命の部屋?…。てかお前、その顔で男なんかよ…。」

「まぁな、みんなに言われる。おっと!それは置いといて、君はい

ま生きる意味がわらないだろ？」
「何で、知ってんだよ！？」

「ん？そりゃこの部屋は生きる楽しさ、生きて意味、生きる糧、生きる素晴らしさ、これらを忘れた人達が来てその人達の運命を変える部屋やからな」

「はぁ！？運命を変えるやと？お前、何様やねん！？」

「ん？俺か、俺は死神」

「死神！！？うわ～すげー！！儂、死神なんか初めて見たわ。お前、名前は？」

「何か物わかりがいいな…普通、『はぁ？死神？頭、おかしいんちゃうん？』とか言うやろ…？まぁ良いか♪その方が話し早いし。俺はクロウだよ♪まぁ、気軽にクロウって呼んで」

「クロウか、変わった名前やな？儂は」

「おっと！大丈夫だよ。」

そう言うとクロウは指を鳴らした。すると、黒い手帳のような物が出てきた。

「え～と、西下やからさ行、さ行っと♪何か最近、さ行の人が多いな……おっしゃ！！あった。西下（さいか）　昭仁（あきひと）年は１７歳、好きな物は動物全般、好きな食べ物は無し！！毎日、野良猫や野良犬にエサをあげてる、え～と車に引かれそうになった動物（人間も含む）を助け

た回数８３回。うお！！かなり動物と人を助けてるな！！」
「まぁな……て、何で儂の事をそんなにも知ってねん！？」
「全部、この手帳に書かれてるんよ。だってそうやろ？相手の事も解らんのに運命を変えるなんて、出来ないよ♪」
「イヤイヤイヤ、運命を変える時点で凄いから」
「そう？まぁ、これが俺の仕事やから」
「へぇ～、死神ってそんな仕事すんねんな」
「まぁね♪」
そう言いクロウは儂に対してニッコリと笑った。

フリョウセイネン　3

「さてと…。お喋りはこれぐらいにして、本題に入ろか」

急にクロウの雰囲気が変わった。さっきまでの楽しい雰囲気じゃなく真面目な雰囲気になり、儂はただ立ってる事しか出来ない。

「今から、あなたに3つの選択肢を与えます。」

「3つの選択肢…？」

「そう、今から言う3つの選択肢の中から1つを選んで下さい。」

「1つ、今と変わらず人生がつまないと感じ生き続ける。2つ、つまない人生に別れを告げ死ぬ。3つ、1日だけ喧嘩をせず過ごす。さぁこの内のどれか1つを選んで」

「1つを選ぶ…」

「なぁ、3つ目の奴を選んだら儂の人生が変わるか？」

「あぁ、変わるよ180度とまではいかないかもしれないけどね。」

「なぁ…どんな風に変わるんだ？」

「それは自分で体験するんだね。」

「本当に儂の運命が変わるんやな。」

「それは１００％保証する。」

「わかった！！３つ目の選択肢を選ぶ！！」

「承知しました。」

そう言った瞬間、儂は黒い霧に包まれクロウの姿が見えなくなった。
儂の視界は真っ暗になり、何も見えなくなった。

「はっ……！！」

儂は叫んで起き上がった。そこは、さっきまで居た真っ白な部屋じゃなく儂の家だった。
窓からは朝日が差し込んで眩しい。

「もう、朝か……」

儂は朝食を食べ制服に着替え家を出た。

儂は大家さんのペットの猫に、

「いってきます。」

と言い学校に向かった。

フリョウセイネン　4

「今日、1日喧嘩はしたアカンってかなり無理な話しやで。だって向こうから仕掛けてくるからかな～」

儂はクロウが言った選択肢にブツクサと文句を付けていた。まぁ、その選択肢を選んだ儂が悪い。

「やべぇ！！」

儂はこの前、ボコボコにした奴らが血相を変えてうろついてるのを見て慌て隠れた。

「クソ！！西下の野郎！！今度、見つけたら絶対にぶっ殺したる！！」

「ちっ！面倒くさいのぉ…」

儂は仕方なく学校に遠回りして行く事にした。

「今日1日、どう過ごそうかな～」

儂はそんなを考え歩いていると

ドン！！

いきなり、後ろから誰かにぶつかられ転けてしまった。

「イテテ…おい！！何処見て歩いとんねん！？」

後ろからぶつかって来た奴の顔を見たら、そこにはかなり可愛い女の子が立っていた。

「あっ！すいません、大丈夫ですか？」

「お前よ謝るのは良いけど、人の顔みて謝れや」

儂はその女の子が顔を見て謝らん事に腹を立て文句を言うた。だがよく見ると、その子の手には白い杖が握らていた。

！！！！

儂は一瞬にして言葉を失った…。その子は目が見えない事に気づき。

「ごめん……お前、目が見えんねんな…」

「いえ、私がぶつかってしまったのが悪いし。それに…もう慣れましたから」

その子は儂にそう言い優しく微笑みかけてくれた…

（儂は何て最低な人間なんや！！）

儂は心の中で自分を責めた。

「あの？ここらへんに交番、あります？」

儂はその声に驚き、慌て答えた。

「あっ！！交番ならこの十字路を真っ直ぐに行った所にあるで。」

「そうですか。ありがとうございます。」

彼女はそう言い、儂にお辞儀し歩いていった。

「その十字路、車が通るから気いつけ……」

儂は自分の目を疑った！！今、まさに一台の車が彼女に突っ込んできてる！！

（彼女は目が見えへんから車が来てることに気づいてへん！もし、車がクラクションを鳴らしても彼女は怖くて体が竦んでしまう可能性が高い！！）

「クソ――――――！！！！」

儂は全速力で彼女の方に走った！！

キィ――――――！！！

車が急ブレーキを踏んだ。

「きゃっ！！」

儂は間一髪の所で彼女に飛びつき彼女を助けれた。

車の運転手も
「大丈夫か？」
と慌て心配そうに見てきた。

儂は自分に怪我が無い事を確認して、女の子に怪我が無いかどうかを聞いた。

「大丈夫です。怪我はないです。助けてくれてありがとうございます。」

「いや、気にせんでいいよ。儂が『危ないで』ってちゃんと言わんかったのが悪かったし。心配やから交番まで送っていくわ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「まぁ、気にすんな。ほら手、出して」

「えっ！？」

「手、握らな儂が何処に居るかわからないやろ？」

「そうですね。」

彼女は少し慌てた感じで手を出した。儂はその手を握った。
（女の子の手ってちっさいねんな…）
儂は心の中でそう感じた。

「あの？お名前、何て言うんですか…？」

彼女が儂に名前を聞いてきた。

「儂の名前は西下　昭仁」

「西下　昭仁さん…格好いい名前ですね。あの、昭仁さんって呼んで良いですか？」

「ん？あぁ、良いよ」
「昭仁さんの手って優しくて暖かいですね。」

儂はその急な発言に驚き少し照れた。

「は、早く行くぞ。儂にも学校があんねん。」

「じゃ！儂はここで」

儂はそう言い、彼女を交番に送り届け学校に向かった。

ガヤガヤザワザワ

儂が登校し、自分のクラスの席に座ると周りに居る奴らが騒ぎ出した。

「あいつ、西下じゃねぇ？学校、辞めたんじゃねえのかよ…」

「今度は西下くん、２０人も病院送りにしたらしいわよ」

（ケッ！！陰口を言いやがって、文句があるんなら儂の目の前で言えよ…）

儂は陰口を言ってる奴らを睨みつけた。陰口を言うてた奴らは怯えて、目をそらした。

ガララ。

担任が教室に入って来た。

「おぉ！西下、学校に来てるようだな。よろしい、今日は無断早退するなよ。じゃ、今日は新しいクラスの一員を紹介する。入ってこい」

「はい！」

儂は転入生か…と思いボーっと見ていた。

「ウソだろ？……」

儂は入って来た転入生を見て驚き、声を出してしまった。入って来たのは、さっき助けた女の子だった。

「え～紹介しよう。木ノ下（きのした）　夢（ゆめ）君だ。彼女は目が見えない。みんな助けてやるように」

「木ノ下　夢です。宜しくお願いします。」

彼女はクラスのみんなに深く礼をした。

「そうやな…木ノ下君、君の席は西下の隣でいいか？」

「えっ！！まじかよ！？」

儂は担任の発言に文句を言った。

「その、声は昭仁さん…？」

「よ、ヨッ！……」

儂は挨拶をする事ぐらいしかできなかった。

ザワ！！

クラスの奴らが慌てふためいてる。そりゃそうやな、だって儂みたいな奴が転入生と知り合いやったら……

「お～！！何や？お前等知り合いか、なら話が早いな。」

「ちょっ…先生」

「何や？私が決めた事に反対か？まぁ、文句があるなら言うても良いけど。その代わり西下、退学な」

（くっ！…担任の野郎、爽やかな笑顔で最悪な事言いやがる）

「じゃ木ノ下、西下の横の席に座れ。」

「あっ、はい！」

「昭仁さん、宜しく」
木ノ下は儂に笑顔で言った。その笑顔に儂は一瞬、鼓動が高鳴った。

フリョウセイネン　5

あれから、約1ヶ月が経っただろうか…木ノ下は女子達が儂の事をいくら悪く言おうが気にせず、儂に普通に接してくれた。

その内、儂は喧嘩をしなくなった。クラスの奴らの儂を見る目が変わった。儂はみんなから普通に接されるようになった。

これも、全て木ノ下のおかげだ。

そして、儂は木ノ下の事が好きになっていた。

木ノ下は目が見えないけど頭も良い何よりも努力家だ目が見えなくても。その分努力し補っている。勉強も点字の教科書を使いみんなに遅れまいと何時も、必死で頑張っている。儂はそんな、木ノ下が好きになっていた

だけど……儂は時々、こんな事を考える

（儂みたいな奴が木ノ下を好きになっていいのだろうか？）

そんな、事を感じながらも普段どうりに木ノ下に接している木ノ下が儂にしてくれたように

儂は今日もまた木ノ下の家に木ノ下を向かいに行った。儂は木ノ下が学校に登校するさい一緒に学校に行ってる。これも、担任の命令

だ……

「ねぇ…昭仁さん…」

「なんや？」

木ノ下が儂に急に話しかけて来た。

「昭仁さんは何時も、私と学校に登校してくれるけど…正直、私が居て嫌でしょ？」

「何言ってんねん。嫌やったらこの1ヶ月間、木ノ下を送ったりなんかせえへんわ。」

「そうですか。……あの！昭仁さん実はお話」

「お――――――い！！！」

木ノ下が何か言おうとした瞬間、後ろからクラスの女子達が走って来た。

「夢ちゃん、おはよー♪」

「おはよー。」

「西下、さっさとどっかに行きなさいよ!!あんたみたいな怖い奴が夢ちゃんの横に置ったら夢ちゃんに男が誰も、寄り付かないでしょ!ねぇ—夢ちゃん?夢ちゃんはせっかく可愛いのに」

「私は全然構いませんよ。」

「いいよ、儂がどっかに行けばいいんやろ……」

「あっ!!昭仁さん……」

(女子達め今まで散々、儂の事怖がってたのに儂がおとなしくなると急に強きになるもんな……そうや!木ノ下あん時、何言おうとしたんやろ?)

儂はブツクサ文句を言い、学校に登校した。儂が登校してから、五分後に木ノ下達も登校してきた。

そして、学校が終わった。木ノ下は下校の時は何時も、女子達と帰るから儂は先に帰った。

儂は家に帰宅し着替えて晩飯の用意をしていた。

メールを受信しました。

携帯が鳴り、儂はメールを見た。

しかし……

儂は一瞬にして血の気が引いた……

メールの内容は【やぁ（＾－＾）ノ西下君、君の大切な人は僕等が預かったいるよ（＾Ｏ＾）返して欲しければ今から君が１ヶ月前に僕等をボコボコにした廃工場に来てね～（'－＾＊）来なかったら、君の大切な人は……まぁ大体、予想がつくよね（笑）あと多分、信じてくれないかも知れないから写メも貼るねぇ～（ｂ＾－。）】確かに写真が貼られていた、写っているのは鎖で縛られてる木ノ下の姿だった……

儂は持っていた携帯を放り投げ、家を出た。

（クソ！！クソ！！クソ！！儂がアホやった！！考えればすぐに気づく筈やった！！儂と一緒に居れば、狙われるに決まってる！！）

儂は全速力で廃工場に向かった。

キィィィ！！ドン！！

儂は不覚にも道から出てきた、バイクとぶつかってしまった……

「だ、大丈夫！？」

「あぁ、大丈夫…」

「でも、病院に行かな」

「うっさい！！平気やからとっとと失せろ！！」

儂はバイクの運転手を怒鳴り、追い払った…

そして、また全速力で廃工場に向かった。

儂は途中で脇腹に強烈な痛みを感じ倒れた。

（あと…あともう少しやのに……っっ！！あばらが折れてる…）

儂は体を引きずりながら、廃工場に向かった。

「何でそこまでする？」

儂は声に気付いた

「この、声は……クロウ！？クロウか！？」

「そうだ…」

儂は前を見るとそこにはクロウが立っていた。

「どうして、君はそこまでして彼女を助けようとする？今、ここで彼女を助ける為に喧嘩したらまたみんなから嫌われるよ？君をそこまでして動かす物は何だ？」

「うっさい…いいか？彼女はな言ってくれたねん……この手の事を『優しくて暖かい手ですね』って言うてくれたねん！！大勢の人を殴り怪我させたこの血で汚れた手を、優しくて暖かい手って言うてくれたねん！！彼女が言ってくれたこの手で、彼女を守らなアカンねん！！儂に…儂に唯一普通に接してくれた彼女を彼女を守らなアカンねん！！」

「そうか…」

「なぁ？クロウお前、死神だよな？」

「そうだ…」

「ならよ色んな事、出来るか？」

「多少、出来るよ」

「じゃあよ、お前が欲しいもんやるからよ…廃工場まで連れて行ったくれんか？」

「いいよ、あとで貰うからな」

「わかった。」

クロウが指を鳴らすとクロウと儂は黒い煙りに包まれた。

「あぁ～あ、西下の野郎なかなか来ねーな。ねぇ、お嬢ちゃん？」

「昭仁さんは来ます！」

「おー強きだ事。でもないくら西下でも、５０人には勝てんわ」

「卑怯者！！」

「なんやと…！？」

「卑怯者って言ったのよ！！昭仁さん、１人に５０人じゃないと勝てない卑怯者！！」

「おい！！コラ！！女！？いくら、可愛いからって調子に乗ってたら殺すぞ！！」

（昭仁さん！！）

「ウワァァァァ！！！！なんや、この煙りは！？」

「どうしてん！！？」

急にどこからともなく、黒い煙が出てきて。その黒い煙が工場の真ん中に集まりだし、人の形になった。

！！！！！！！！

そして、中から西下とクロウが出てきた。

「はぁはぁ～ん、西下なかなか凝った、登場の仕方やな？」

「木ノ下は何処や…？」

「大丈夫。お姫様は無事だよ。ん？なんやお前、助っ人よんだんか？あ～メールに1人で来いって打ち忘れてたな！しかも、よく見ると女やんけ！！」

ギャハハハハ！！

周りに居る奴らが大声で笑った。

「おい！！そこの大将…」

「ん…？？大将て僕の事か？」

「あぁ、そうだ…貴様に２つ言うことがある…」

「何？」

「１つ、俺は男だ…！２つ、５０人じゃ俺等には勝てん！！」

「あ〝ぁ！？なんやと！？」

ある１人がクロウの発言に腹を立て、襲いかかった。

ドゴ！！

鈍い音が廃工場の中に響いた。

「あ・あ……」

クロウに襲いかかった男は腹を思いっきり殴られ、音を立てて倒れた。

「お前等！！粋じゃねぇな…男、１人に５０人じゃないと勝てる自信がないのか！？ふざけてると、殺すぞ？」

一緒、儂は背中に寒気を感じた。

「殺される！」

そう言い、周りに居た奴らは逃げてった。

「お前等！！逃げんなや！クソー！！」

「西下、あいつはお前がやれ…」

クロウはそう言い儂の肩をポンっと叩いた。

「じゃ、お仕置きと生きますか…？」

「ヒッ！冗談やって！なぁ？軽い冗談のつもりやってんて！」

「冗談か…質の悪い、冗談やの！！？」

「ヒィィィィ！！」

儂はボコボコにして、木ノ下を助けた。

「木ノ下！？大丈夫か！？」

「昭仁さん！？怖かったよ。」

木ノ下は儂に抱き付き泣いた。

「ごめな、ほんまごめな」

儂は抱き付いてきた木ノ下を強く、抱き締めた。

「もしもし？良い雰囲気の所、悪いけど」

儂は木ノ下を体から離しクロウの方に行った。

「あぁ、そうやな…さぁ、儂から欲しいもん持ってけ」

「はぁ？何を言うとんの？誰がお前から貰うって言った？」

「えっ！？」

「止めろ！！彼女は関係ない！！」

「お前は俺が欲しい物なら何でもくれるって言うたやろ？」

クロウは木ノ下に近づいた。儂はそれを止めに掛かろうとしたが体が動かない。

「やめろ――――！！！！」

クロウの手が木ノ下の頭の上に置かれ、光った。そして、木ノ下はゆっくりと倒れた。

儂は一瞬にして谷底に落とされた気分やった。儂は体が動くようになり木ノ下のに近寄った。

「木ノ下！？木ノ下！？大丈夫か！？」

「ん…昭仁さん？あれ！？私…目が見える！！」

「えっ！？」

儂は驚いた！！

「約束通り、俺が欲しい物は貰った」

儂は泣きながらクロウにお礼を言った。

「ありがとう…ほんまにありがとう…ありがとう…」

「ん？何で、お礼を言う？俺はお前の大切な人から奪ってんぞ？変わった人間やな…フッハハハハ」

クロウは笑いながら消えた。

「昭仁さん、あの人は？」

「あいつは儂の運命を変えてくれた人…」

「そう…そうだ！！昭仁さん？」

「ん？」

「言いたいことがあるの？」

「何？」

「私と付き合って下さい！！」

「えっ！？儂、見たいな奴でいいんか？」

「うん！昭仁さん、カッコイいよ」

「じゃ！！よろしくお願いします。」

「こちらこそ」

この瞬間、儂は心に決めた木ノ下を守って生きるって。

ありがとう、クロウ……

フリョウセイネン†完†

オンナノコノヨウナショウネン　1

『空…お前だけでも助かれ……』

『太陽――――！！！』

『悪魔！！死神！！外道！！どうして！？あなたじゃなく！！太陽がこんな事になるのよ！！？』

（違う…止めてくれ……）

『ねぇねぇ知ってる龍弥くん、三谷くんを見捨てたらしわよ最低ね……』

（違う…違う！違う！違う！違う！）

「止めてくれ――――――――――！！！！」

「ハァハァハァハァ……夢か……」

俺は冷や汗を流す為に、シャワーを浴びた。

俺の名前はクロウ、顔は女みたいだけど男だ。俺は体からバスタオルで体を拭き、服に着替えた。

「そう言えば、今日アウルが話しあるって言ってたな。行かないと」
俺は指を鳴らし、パンとイチゴジャムとコーヒーを出し食べた。
「よし！！朝食もすましたし。行くか♪」
俺は靴を履き外に出た。ここは死神界、建物の作りは中世ヨーロッパ風かな。この世界の面積はそうだな…ロシアより少し大きいぐらいだな…まぁ約3分の1が森だけどね。
「あっ！！クロウ兄ちゃん、おはよー！！」
「おはよう♪」
俺は小学生達に挨拶した。
「クロウちゃん、おはようさん」
「おはようございます。」
今度は肉屋さんのオバチャンとオッチャンに挨拶した。
道行く人達に俺は挨拶され、挨拶した。
そして、俺は古びた城に着いた。

ここは死神の仕事場みたいな所だ。ここで俺達、死神は運命を変える人物の情報などを教えてもらう。

（いつ見ても大きいな…）

俺は門をくぐり城に入った。

オンナノコノヨウナショウネン　2

俺は薄暗い廊下を歩いてる。

「クロウ、今度は何をやらかしたの？」

俺の少し前で壁に寄りかかってる奴が笑いながら言ってる。

「なんだ…クレインか……」

「ヨッ！！」

奴の名前はクレイン。女だが性格は男だな。顔は美人だろう髪の色は白でかなり長い。彼女も死神だ。

「お前には関係ないだろ。」

「何かクロウ様子がおかしいよ…」

「ちょっと、嫌な夢を見て……」

「私にはどんな夢かわからないけど。そんな、暗いクロウはクロウじゃないよ。」

彼女はそう言い俺に笑いかけてくれた。

「そうだな。」

「そうそう、クロウ。最近、街に美味しいカレーうどんのお店が出来たらしいけど行ってみる？」

「いいねぇ～俺、カレーうどん大好き♪」

たわいない話をし盛り上がっていると、後ろから。

「クレインちゃん～～～！！」

と叫びながら全速力でこちらに走ってくる男がいた。

「げっ……！」

クレインが嫌そうな顔をしている。

そして、男が俺達に追いついた。

こいつの名前はピーコック。綺麗な青い髪をしてる顔は普通より少しかっこいいかな？そして何より、かなりの女好きだ……。

「ハァハァハァハァハァハァ」

ピーコックはかなり息をきらしてる。

「お待たせ、僕のマイエンジェル」

「誰がお前のマイエンジェルなんだよ！！」

「ハハハハハ！！そんな、わかりきった事今更。君だよ僕のマイエンジェル、クレイ」

ベゴ！！！

廊下に鈍い音が響いた。理由はピーコックが言い終わる前にクレインがピーコックの顔面にパンチをくらわしたのだ。

ピーコックはクレインのパンチで床に思いっきり吹き飛んだ。

「大丈夫！！僕は君のその暴力が愛情の裏返しだって事はわかってるから！！おぉ！！そこにいるはマイエンジェル、クロウ！！」

ピーコックは鼻血を出しながら俺に言った。

ハァー…

俺はため息をついた。

「お前にはいったいどんなに、マイエンジェルが居るんよ？」

「そりゃあ、世界の女性の数だけさ！！」

「呆れて物が言えんわ。それに、俺は男だ！！」

「僕はそっちも大丈」

ドゴ！！

また、廊下に鈍い音が響いた。俺がピーコックの顔面を殴ったのだ。

「2人とも馬鹿だな。Mの僕に攻撃するとゆうことは逆に元気にさせ」

ドゴ！！バコ！！

またまた廊下に鈍い音が2撃、響いた。俺とクレインがピーコックにキックとパンチをくらわしたのだ。流石のピーコックもこれには、気を失った。

「クレイン、行こうか♪」

「そうね、アウルが待ってるからね♪」

俺達は何もなかったかのように歩き出した。

薄暗い廊下を歩く事、約１０分俺達は大きな扉の前に立っていた。

俺が指を慣らすと扉が低い音をたてて開いた。扉の向こう側には大広間があり、一番奥に机が置いていてそこに人が座っている。

「クロウとクレインか。クロウよこっちに来い…」

俺は座っている奴に呼ばれ歩いていった。

俺を呼んだ奴の名前はアウル、髪は銀髪でちょんまげみたいにしている。俺達、死神の中で一番偉い人だ。

「なんだよ、アウル…」

「クロウお前、勝手に現世に行ったみたいだな？」

「いったよ♪」

「そして、目が見えない女の子の目を見えるようにしたな？」

「したよ♪」

「馬鹿やろう！！」

俺は思いっきりアウルに怒鳴られた。

「俺達、死神はな運命を変える人物以外の奴に正体を知られたら駄目なんだ！！しかも、運命を変える人物以外の奴の運命を変えるなんて！！お前はとんでもない事をしでかしたんたぞ！！わかってんのか！？いくら、俺がお前の元師匠でも俺がやれる事にも限界がある！！」

「わかってるさ！！」

「じゃぁ？どうして？」

「嫌だったんだよ。何も出来ない自分が…」

「お前、まだあの事を引きずってんのか……？」

「うっせい！！」

そう言いクロウは部屋を飛び出した。

「馬鹿やろう……いくら、ズルズル引きずっても何もなんないだろ……」

アウルは肩を落としため息をついた。

「あの～アウル？あの事って何ですか？」

「確かに、僕も気になる」

「うわ！！ピーコックいつの間に！？」

「今さっきさ！！」

「クレインにピーコックか…」

アウルは2人が居る方に向いた。

「気になるか？」

「えぇ…」

急に周りの空気が重たくなった。

「じゃぁ、話そう。この、悲しく悲惨な話しを…」

オンナノコノヨウナショウネン　3

それは、６年前の事だ……

～６年前の春～

「ねぇねぇ君♪彼氏とかいるの？」

「……」

「ねぇてば♪」

「俺は男だ……」

「うそ……！！」

俺は俺に話しかけて来た男達から離れた。

俺の名前は龍弥　空　（りゅうや　そら）性別は男だ。じゃぁ何故？男達に女と間違われたのか。その理由はこの顔にある。俺の顔はそこら辺の女子達より数倍、可愛いい。（かなり失礼な発言をした）だから、俺は女子と間違われる。俺はそんな顔が嫌いだ……
今日は俺が行く高校の入学式だ、この高校は制服はなく私服せいだ。なので、私服だから男か女の区別が余計につきにくい。

体育館で校長の下らない話しが終わり。俺達、生徒は自分達のクラスに移動した。生徒は担任が来るまで生徒同士で話しとけと言われた。俺の席は窓側で一番後ろだ。俺は誰とも話さず顔を伏せ寝る体勢に入った、しかし誰が話しかけてきた。

俺が顔を上げるとそこには、男が居た。どうせ、こいつも俺が女と思い話しかけてきたんだろと思った。

そして、俺は
「俺は男だぞ…」
と言いまた寝る体勢に入ろうとしたが、男が急に
「えっ！？そんなのわかってるよ」
と言い俺は思わず顔を上げた。

「えっ！？お前、俺が女と思って話しかけてきたんじゃ……？」

「お前、面白い奴やな。最初から男ってわかってたよ♪みんな、色々話してるのに君だけ誰とも話してないやろ？だから、話そうと思ってな」

「そうか……」

「そう♪俺の名前は三谷　太陽　（みたに　たいよう）太陽って呼んで♪」

太陽は俺に笑いながら手を出し握手を求めた。

「俺の名前は、龍弥　空よろしく」

俺は太陽が出した、手を握り握手をした。

約3ヶ月が経っただろうか。太陽はクラスの人気物になった、スポーツは出来るし勉強も出来るそしてかなり顔がカッコ良く女子にも人気だ。そして、太陽は俺の初めての親友になった。

休み時間に何となく話しをしていた。

「太陽は良いよな、スポーツは出来るし勉強も出来るから……」

「何、言ってんだよ空だって勉強出来るやろ！しかも、知ってる？空のファンクラブまで在るねんで」

「まじかよ！？」

「本当♪」

「そんな物があるなんて……」

「まぁ♪落ち込むような事じゃないやん！」

「まぁ、そうやけど……」

太陽は大爆笑しているそれに釣られて俺も笑った。

俺は一緒、太陽と親友のままで居られると願った。

「そんな…！！クロウが元々、人間界の人間だったなんて……」

「隠していて、すまなかった…」

「しかし、アウル？どうやってクロウはこの死神界に来たんだ？それに、クロウは親友の太陽を残して死神界に来たのか？」

「ピーコック、確かに疑問に持つ筈だな…今の話しを聞いてる限りではクロウが死神界に来る理由はわからない。起きてしまったんだよ…クロウの人生を変えてしまった出来事が……」

私とピーコックは唾を飲んだ……

オンナノコノヨウナショウネン　４（前書き）

更新が遅くなり誠にもうしわけありません（Ｔ＿Ｔ）
テストや色々重なり小説を書く時間が全く在りませんでした（Ｔ＿Ｔ）

１日が３０時間あれば５時間小説を書く為に使うのに……（どっかで聞いたようなフレーずやな…？）
（＊、Д、）＝３

ではあなたに選択肢を与えます第１３話お楽しみ下さい！！

オンナノコノヨウナショウネン　4

「なぁなぁ空？明日さ用事ある？」

太陽が俺に聞いてきた。

「いや、用事は無いけどなんで？」

「そうか♪じゃあさ明日買い物に付き合ってくれへん」

太陽は手を合わせ俺に拝んでる。

「なんで拝んでる…？まぁいっか良いよ」

「まじか！？ありがとう～」

「うん」

俺はあの時、どうして返事をしてしまったのだろうか…

そして次の日俺は太陽の買い物に付き合う為に駅で待っていた。

「すまねぇ～」

太陽が手を振って必死にこっちに向かって来てる。

「待たせてすまん…」

太陽は息を切らし前かがみになって呼吸を調えている。かなり急いで来たのだろう。

「気にすんな！」

俺は太陽の肩をポンポンと叩いた。

「ありがとう♪じゃあ行くか！！！」

「おう」

太陽は俺の肩を叩き先に歩いていった。俺は太陽のあとを小走りで追った。

「なぁ太陽？今日は何買いに行くん？」

「あぁ！え～と今日はお袋の誕生日やねんだからプレゼント買おうと思ってな♪ほら！俺の所、母子家庭やろ？何時も迷惑かけてるから誕生日プレゼントの１つや２つ買ったらなバチ当たるやん。」

太陽は少し照れながら言った。

「太陽はお母さん思いやな」

「でもマザコンじゃないで！！」

「わかってるよ」

俺は少し笑った。

ふと気づくといつの間にか目的地のデパートの前に来ていた。

「案外、早くついたな」

「そうだな」

俺達はデパートの中に入っていった。

今日は祝日だからかやけに人が多い。

「太陽？プレゼントは何にするか決めてるか？」

「マニキュアを買うって決めてたんよお袋いつも化粧してないから爪ぐらい手入れしてもらおうてね♪」

「ふぅ～んマニキュアか……ん？ちょっと待てよ？プレゼントを沢山買って1人じゃ持たれへんから俺を呼んだなら話しはわかるけど。マニキュア一個の為に俺を呼ぶ必要はなかったんじゃ……？」

「……」

太陽は黙り込んでいやがる。そして太陽が口を開き出てきた言葉は

「ほら？男の俺がマニキュア買うなんてなんか変に思われるやん……？だから、空に付いてきもらって…彼女役をやってもらおうと……」

「なる程、俺が女みたいな顔やから彼女役になってもらう為に連れてきたね～……帰る！！」

俺は太陽に背を向け出口に向かおうとしたが、太陽が俺の方を掴み俺は前に進めなかった。

「お願いやって！！」

太陽が必死に頼んでる。

「断る！！」

しかし、俺は必死の願いを拒否した。

「ほんまにお願いやって！！」

「クドいぞ！！太陽！！」

「今度、カレーうどんおごったるからさ♪」

「くっ…！」

一瞬、俺の心が揺らいだ…

「一杯じゃダメなら三杯、いや！！五杯でどうだ！！」

「手をうとう」

俺はカレーうどんの欲に負けてしまい太陽の彼女役を引き受けてしまった。どうして？俺はこうもカレーうどんに弱いのか…？

「いらっしゃいませー！」

女性店員の妙に甲高い声が耳に響いて痛い。

「今回は何をお探しで？」

今度は営業スマイル攻撃か！！目が痛い…

太陽が
「こいつに合うマニキュアを買いにきました♪」
って店員さんに言った。

店員さんは
「あら！？優しいボーイフレンドね顔もカッコいいし貴女も可愛いいお似合いのカップルね！ん～貴女に似合う色は……薄めのピンクなんてどう？可愛いいわよ？」

「じゃそれを下さい…」

俺はなるべく女ぽい声を出した。

「ありがとうございます！特別におばさんがプレゼント用に包装してくわね？」

なんて優しいおばさん何だろうか。

「また、お越し下さい！」

俺達は化粧品売り場を後にした。

「プックックックッ」

横で太陽が必死で笑いをこらえている…

「空、お前彼女役の才能が在るって」

「太陽？死にたい？」
俺は満面の笑みで太陽に質問した。

「冗談やって冗談」

「冗談でも許されへんわ…」

「ごめんやって買うもん買ったし帰ろか？」

「そうやな！」

俺は太陽にそう返事した。その時！！

ドッゴォォォン！！！

物凄い音と揺れが来て俺はバランスを崩し頭を床にぶつけ気を失った……

オンナノコノヨウナショウネン　5

「……ら……そ……そら……空！！」

「ん……ん」

俺は誰かの声で起きた。

「頭……いてぇ……」

俺は痛む頭を押さえながら体を起こした。しかし、周りを見るとそこはさっきまで居た場所とは違いそこら中にコンクリートの欠片が落ちていて暗い……少し明かりがあるから真っ暗ではない……

「ここどこだ……？」

俺は自分の居場所がわからず焦っている……

「空！！大丈夫か！！」

横を見ると太陽が居た。

「生きてて良かった俺はてっきり……」

太陽は少し涙ぐんでいた。

「太陽……泣くなよ。それよりここは……？」

「そうだな…ここは……」

太陽は目に溜まっていた涙を拭い話し出した。

俺達が出口に向かう途中、物凄い音と共に揺れがきて俺は転けて気を失ったらしい。そして太陽は床に踏ん張り揺れが収まるのを待っていたが、いきなり床が抜け落ち俺達は落ちたらしい太陽の予想ではここは地下駐車場だろうと言っている。

「で？太陽どうする……？」

「どうするもこうするも出口を探すしかないだろう」

「そうだな…」

俺達は立ち上がり出口を探すことにした。

俺達はコンクリート片が落ちている道を歩いた。

「にしても…何処に出口があるんだ……？」

「とりあえず、エスカレーターがある場所を探せば上に上がれるはずだ」

俺達はエスカレーターを探した。
しかしエスカレーターは見つからずあるのはコンクリートの欠片だけ……

「クソ！！見つからねぇ！！」

「落ち着け！空！！焦りが命取りだ！！冷静に考えれば光も見えてくる！！」

「そうだな……すまない……」

「気にするな♪」

俺は少し落ち着きエスカレーターを探した。

「おい！！空！！こっちに来い！！」
太陽が俺を呼んだから俺は走って太陽の方に走っていた。

「これ見ろ」
太陽が指差した所には通気口があった……

「これが？どうした……？」

「忘れたのかここは地下駐車場の横に食品売場があるだろ？もしかしたらその食品売場に続いてるかも知れない…」

「なる程！！……待てよ……もし途中で通気口が崩れたら……？」

「確かに無いとも言えない……だがこのままここにいてここが崩れたらどうする？なら生き延びる確率があるこの通気口にかけるしかないだろ」

「そうだな…」

俺達は通気口に入った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2599a/

あなたに選択肢を与えます

2010年10月28日00時50分発行